

氏名	中村 洸太			
学位の種類	博士（ヒューマン・ケア科学）			
学位記番号	博甲第 9121 号			
学位授与年月	平成 31年 3月 25日			
学位授与の要件	学位規則第4条第1項該当			
審査研究科	人間総合科学研究科			
学位論文題目	日本における性的マイノリティの精神的健康に関する研究			
主査	筑波大学教授	医学博士	水上勝義	
副査	筑波大学教授	博士（心理学）	庄司一子	
副査	筑波大学教授	医学博士	斎藤環	
副査	筑波大学准教授	博士（医学）	根本清貴	

## 論文の内容の要旨

中村洸太氏の博士學位論文は、性的マイノリティの精神的健康に関連する要因について詳細に検討するとともに、イメージ法の介入を実施し、その効果を検討したものである。その要旨は以下のとおりである。

### （目的）

著者はまず先行研究を概観し、性的マイノリティの精神的健康が不良であることは報告されているものの、性同一性や性的指向、個人の心理特性に焦点を当てた精神的健康の検討がきわめて少ないことを指摘した。そこでこれまで明らかにされていない、性自認や性的指向、個人の心理特性や個人の認知やこれまでの経験と、性的マイノリティの精神的健康の関連を検討すること、そして精神的健康の保持・増進に効果的なセルフケアプログラムを構築することを目的として、5つの研究を行っている。

### （対象と方法）

研究Ⅰから研究Ⅳにおいてアンケート調査を、研究Ⅴでは介入と介入前後にアンケート調査を行っている。いずれの研究も、自記式質問紙に回答可能な20歳以上で性的マイノリティを自認する者を対象としている。無記名自記式の質問紙調査を実施し、522名の回答のうち333名（平均年齢 $30.6 \pm 9.3$ 歳）を有効回答とし解析対象としている。

研究Ⅴの介入調査には、20歳以上の性的マイノリティを自認する者67名（介入群20名、非介入群47名）が参加し、1ヶ月後まで追跡が可能であった44名（介入群20名、非介入群24名）を分析対象としている。介入群に対しては、「情緒安定とあるがままの自分を見出すイメージ法」による個別介入を行ない、非介入群の質問紙調査の結果と比較し効果を検証している。

### （結果と考察）

著者は、研究Ⅰにおいて出生性と性自認が一致しない場合は、一致している場合に比べて精神的健康が不良な割合が有意に多いことを報告し、性的マイノリティの集団内においても、セクシュア

リティにより精神的健康に有意差があることを明らかにしている。著者は、出生性と性自認が一致していない場合、トイレや制服、日々の言動や仕草など、生活する上で困難な場面に直面する機会が多いこと理由に挙げている。

研究Ⅱでは、性的マイノリティに関連したイベントへの参加状況や、アウトティングの経験、いじめの経験、不登校の経験、自殺未遂や自殺念慮の経験と現在の精神的健康の関連を調査し、イベントの運営経験があること、自殺未遂や自殺念慮を抱いた経験が有る場合に精神的健康が不良であることを示している。二次予防、三次予防的な観点からいじめや自殺未遂などの経験を有していたとしても、自分自身を肯定視できるようなサポート体制の充実が重要であると指摘している。

研究Ⅲでは、個人特性と精神的健康の関連について検討し、精神的健康が良好な群は不良な群に比べて、自己抑制度や自己否定感が有意に低く、情緒的支援認知や資質型レジリエンス、獲得型レジリエンスが有意に高いことを明らかにしている。

研究Ⅳでは、研究ⅠからⅢまでの結果を踏まえて、多変量解析により検証し、自己否定感と資質型レジリエンスの2つの心理特性が精神的健康に関連することを示している。著者は、性的マイノリティの集団において、とくに自己否定感を改善していくことが精神的健康を良好にしていくことが重要であることを指摘している。

以上の結果をふまえて、研究Ⅴで著者は、自己肯定感や自信感などの自己に対するイメージを良好にするセルフケアの方法として「情緒安定とあるがままの自分を見出すイメージ法」を用い、性的マイノリティの精神的健康に対する効果を検討している。その結果、介入群は、介入直後に精神的健康、自己否定感、情緒的支援認知、資質型レジリエンス、獲得型レジリエンスに良好な変化を認め、1ヶ月後にも精神的健康や自己否定感が介入前に比べて良好な状態が維持されたことを報告している。なお著者は、介入効果の持続のためにセルフケア行動が意識づけられるような教育内容の工夫やフォローアップが必要であると述べている。

(結論)

以上の結果から著者は、性的マイノリティの精神的健康に、セクシュアリティや経験や認知、個人の心理特性などが関連すること、自己否定感を改善することが性的マイノリティの精神的健康の保持・増進に重要であること、自己に対するイメージを良好にするセルフケアが性的マイノリティの精神的健康の改善に効果的である可能性があることを結論とした。

## 審査の結果の要旨

(批評)

本研究は、不良な場合が多いとされながらも、これまで十分検討されていなかった性的マイノリティの精神的健康に関連する要因について詳細に検討し明らかにした。とくに自己否定感を改善する支援やセルフケアの重要性を指摘し、介入研究からもそれを裏付ける結果を示している。本研究成果は、性的マイノリティの精神的健康に関する理解を深めるとともに、エビデンスに基づいたセルフケアや支援の一助となる、社会的意義が大きい研究である。

平成31年 1月15日、学位論文審査委員会において、審査委員全員出席のもと論文について説明を求め、関連事項について質疑応答を行い、最終試験を行った。その結果、審査委員全員が合格と判定した。

よって、著者は博士(ヒューマン・ケア科学)の学位を受けるのに十分な資格を有するものと認める。